

## 高遠町——地域に根ざした生涯学習

はじめに

皆さん今日は、ご紹介にあずかりました笹本です。何度もこちらに来ておりますので、覚えている方もおいでかも知れませんが、しばらくの間、お付き合いください。

今や日本は大きな曲がり角にきています。私は戦国時代の研究をしていますが、現在は、あの激動の戦国時代、あるいは明治維新、そして敗戦と並ぶ、あるいはそれ以上の歴史の大きな転換期にあります。国は膨大な借金を抱え、大変高い失業率、これまで安全だと思っていたのに、社会環境も食生活も周囲には危険がいっぱい、これまでの年功序列型の組織ではやっていけない等々、数え上げていけば暗い話ばかりです。これは戦後の社会が疲弊してきており、これまでのシステムとは異なる、次の時代のシステムをつくっていかなければ、もうやっていくことができないことを示しているのではないのでしょうか。

このような大きな曲がり角は、日本国だけではありません。日本の基礎をなす県や市町村においても同じで、高遠町においても合併問題や町の財政など、多くの課題があります。私たちは何か事件が起きたり、行動したりする時にはどうしたらよいのか、といういろと考えます。考えるためには、材



信州高遠美術館

料が必要です。日常的に考える訓練をしておかねばなりません。いまだかつて起こったことのない転換期を迎えている今だからこそ、みんなで学んでいかななくてはならないのです。

学ぶことに制約はありません。知識が少なかつたらそれを増やすために努力すればいいわけで、知恵ある者はもっと学ぼうとしているはずです。人が人として生きるためには社会のルールをはじめとして、いくつもの知識が必要です。しかも、ルールや社会は常に変化しています。生きること自体が学習であり、それを積極的に宣言したのが、生涯学習だと思えます。

本日は「地域に根ざした生涯学習」という題で講演を求められていますので、高遠町で高遠のことを学ぶ、あるいは高遠にとつて役に立つ、という点を主体にお話をさせていただきます。

高遠町の特徴として、これだけの人口と予算規模でありながら、学びのための拠点がたくさんあることがあげられます。まずは非常に立派な歴史博物館を持っており、しっかりと過去や現在のことを考えることができます。信州高遠美術館も素敵ですね。平山郁夫さんのような日本を代表する日本画家と直接つながりを持っているなんて、よそでは考えられないことです。高遠をふるさととした中村不折の「下和璞を抱いて泣く」を見ることができます。また、高遠に生まれた日本



遠照寺釈迦堂

画家池上秀畝しゅうこうの作品にも会えます。地方にいながら、いつも変化に富んだ美術作品を見ることができると、高遠の人は幸せですね。しかも図書館も良くできていて、スリッパも履かずに裸足で中に入るなんて、温かいじゃないですか。文化センターとして位置づけられていること自体が、大きな意味を持ちます。ここには藩校進徳館しんとくかんの蔵書などがあり、さらにいったん町から離れた蔵書も地元じもとに置こうとしています。

国史跡の高遠城跡と進徳館、国の重要文化財に指定されている遠照寺しやうじの釈迦堂しやくかどうと多宝塔たはうたう、建福寺けんぷくじにある紙本墨画中観音左右竜虎図など、多くの文化財を持つており、学ぶべき対象物には事欠きません。

皆さんは高遠町にお住まいなのですから、まず学ぶ対象としてふるさとの高遠そのものがあるべきです。高遠には日本全国から桜の時期を中心にして観光客がやってきます。その目当てはお城に咲く桜と、歴史に彩られた町にあります。しかも、観光客が知らない魅力的な場所は町内にまだまだあります。これだけ魅力的な場所に住んでいるんですから、町そのものを学びましょう。高遠町全体が私たちが学ぶべき博物館であり、学校なのです。

大正五年（一九一六）八月に高遠町を訪れた田山花袋たやまかたけは、「たかとほは山裾のまち古きまちゆきあふ



田山花袋の歌碑

子等のうつくしき町」と詠じています。私は特にこの「ゆきあふ子等のうつくしき町」というところが好きです。子等は女性だとの説もあるようですが、ここではそのまま子どもでいきたいと思います。子どもが美しいというのは、それだけ立派な教育をしているからではないでしょうか。今でも町にはすばらしい子どもたちがたくさんいますが、子どもたちからだって、私たちはいろいろなことが学べるはずですよ。子どもを含めて高遠町で自慢すべきは町に住む人々です。私の教え子がこの町で働いています。ある時、旅行に行くため早朝に歩いていたら、見知らぬお婆さんから声をかけられ、「どちらへ行くんですか」と聞かれたそうです。「これから旅行に」と応えたら、「気を付けてね」といわれたそうです。見知らずの人に気さくに声をかけ、案じてくれるような方がいっぱいいるのが高遠町です。周囲の素敵な人たちから、私たちはもつともつと学んでいかなければならないと思います。

私たちはもつとふるさとを知って、良いところを伸ばし、悪いところを改善していかなければなりません。これをしっかりすれば、高遠はもつと良くなるはずですよ。そのためには生涯かけてふるさとを学習しなくてはなりません。ふるさとについて知識が増えてくれば、誇るべき点がたくさんになり、他人に伝えたいと思うようになります。町全体が歴史に満ちた博物館であるなら、そこで学び、

他人にその良さを伝えようとする人は学芸員です。町民全員が高遠町のことをきちんと説明できる、学芸員にならなくてはなりません。

この大きな社会の曲がり角に來ている時に、町が何とかしてくるだろう、誰かが何かしてくれるだろうといった、他力本願の考え方では、町は良くなりません。これからの社会を切り開くため、皆さん一人一人が考えて動いていく必要があります。町の未来はみなさん一人一人の力に負うところが大きいのです。あなたも町長、博物館長、そして校長先生になったつもりで、生涯をかけて学び、その知識を人のため、町のために活用していただきたいものです。

## 一、学びと町づくり

私は日本史を学んでいますが、その目的は、自分がどこから來て、どこに行くのかを明らかにしたい点にあります。私っていったいなんだろう、私の存在はどのような意味を持つのだろう、こういうことを時間経過を基軸に置きながら問いかける学問の一つが歴史学です。私が思索するのは今ではないのですが、今は過去と未来の接点であり、私たちが認識できる材料は過去しかないので、今を知り、未来を考えるために、過去つまり歴史を学ぶわけです。学びは自己から始まり、家族、そして周囲へと広がっていきます。

私にとっては、遠いアメリカのことをどれだけ知るよりも、自分の住んでいる地域、住んでいる町、

そして県、さらには日本、アジア、世界という順序で重要性があります。知識として持つべきも、この順序であるべきでしょう。どれだけパリのことを知っていても、自分の住んでる場所を知らないような上滑りの人間にはなりたくありません。おそらく、皆さんにとっても同じではないでしょうか。

私たち一人一人は故郷を持っており、そこで多くのことを学び、また今住んでいる地域に縛られています。自己を知るのに、生きてきた、あるいは現在住んでいる舞台になっている地域を知ることが、きわめて重要です。皆さんがよそに行つて観光したり、博物館や美術館などを見る際には、自分を考え、おそらくそのことを通して、自分の住んでいる世界との比較をしているはずで

私には生涯学習の意味も、自分探しにあると思います。自分はどういう人間なんだろうと冷静に考え、自分の特徴はどこにあるんだろうと自己認識し、社会の中で自分はどのような意味を持っているんだろうという位置の確認、これを私たちは一生続けていかねばなりません。本当の自分を知れば自分自身がいとおしくなります。自分の価値をしつかり認識できれば、他人が大切になり、他人の価値もよくわかり、他人を尊重することができるようになります。

知識がどれだけあつても、生きていく道具になつていなければ、宝の持ち腐れです。皆さんの知識は自分が生きる時に活用されて、あるいは他人のために役立たれて、はじめて意義を持ちます。

皆さんは自分の知識を、もつとも身近なお子さんや子どもさんへ、どれだけお裾分けしていますか。ふるさと高遠の良さを、悪いところを、どれだけ子どもにも伝えようとしていますか。皆さんも歴史の

中の一環をなしていますが、町民としての皆さんは、御自身が高遠の歴史の中で果たす役割をどれだけ認識しながら、子どもや孫に自分や高遠のことを語っているのでしょうか。高遠の未来を良くするために、皆さん一人一人がきちんとした語り部になって、良い点と悪い点を伝えて欲しいものです。

皆さんは自分が住むふるさと高遠にどのくらい誇りを持っているのでしょうか。これだけですばらしい町ですから、誇りを持たないわけがないと思います。地域に誇りを持っていれば、その誇りを自然と他人に伝えたくなくなります。よそから来た観光客が道に迷っていれば道を教え、あそこへも行ってみなさいと教え、町のいいところはどこですか、と尋ねられれば、思わず教えたくなる、これが町民の誇りではないでしょうか。もし誇りを持って、高遠のことを他人に伝えたくなくなるとすれば、それこそすでに皆さんが町の学芸員、教師としての役割を負い始めている、と私は思います。

高遠町が持っている博物館や美術館は、町民の税金をもとにして建てられているのですから、本来、町民のための施設です。日ごろ一番訪れるべきは町民です。自分の町を知ることなしに、よその市町村と比較はできません。自分を知るためには、町のことを知らなくてはなりません。そのための施設が博物館や美術館なのです。

ところが、ややもするとこうした施設は観光客を誘致するためのもので、観光の道具だと勘違いされています。観光客は通りすぎていきますが、私たちは町に住んでいます。町民にとって、これらは教育施設であり、みんなの財産なのです。町が大きなお金をかけているのは、町民が学んでくれるこ

とによって、その知識が町の未来をつくる大きな資源になると考えているからです。とするならば、皆さんがこうした学ぶことのできる町の財産をどれだけ活用しているかが問題です。町民として、十分にこうした施設を活用してくれることを望みます。

町の良さについては、この次に触れることにして、先に現状の問題点を確認してみたいと思います。私たちが生きている社会をじっくり見ることににより、当面解決していかなければならないことが自覚できます。

物に満ちあふれている現在の社会の中で、足りない物を確認しましょう。実はすでにここに落とし穴があります。私たちは飽食の時代に生きていて、ありとあらゆる食べ物を、きわめて贅沢に食すことができます。しかしながら、日本の食糧自給率は四〇パーセントです。それこそ世界中から食糧をかき集めて、現在の私たちの食生活は成り立っているのです。もし外国からの食糧輸入が途絶えたら、日本はどうなるのでしょうか。もし日本の経済力が弱まり、よその国でもっと高い金額で食糧を購入するようになったら、日本はどうやって食糧を得るのでしょうか。あるいは食糧輸出国の人口が増えて、食糧を輸出できなくなったら日本はどうなるのでしょうか。

時々問題になるのが、外国でつくった穀物や野菜などにおける農薬残存量や、日本では禁止されている農薬の使用です。また、船などで輸送する際の薬漬けも問題です。つまり私たちは食糧に取り巻かれているように見えながら、安全な食糧供給という意味では、実に頼りない状態にあるのです。



日本では今、防衛論議が声高に叫ばれています。防衛も国民の生命があつての問題です。いつ食糧が輸入できなくなるかも知れない危険、また輸入される食物によつて体の内側から危険にさらされる可能性、こういったことの議論がまだにきちんとなされておられません。

このことを考えると、山間地にあつて、周囲で食糧生産ができる高遠町の住民は恵まれていると思えます。いざとなつたら、一定量の食糧を自分たちで確保できるからです。第二次世界大戦の戦中、戦後、都会から多くの人が買い出しに來ました。彼らの命を支えたのは農山村で蓄えられていた食糧でした。いつあのような事態になるとも限りません。とするならば、農地を持ち、自分がどのような農薬を使っているかも認識しながら、食糧を生産できる皆さんは、ある意味では特権階級なのです。

これまで農業は経済的に成り立たないことばかりが叫ばれましたが、見方を変えたと自分の大切な命のエネルギーを、自分で安全に生み出すことができるくらい幸せなことではないはず。経済効率という物差し以外に、人間としていかに生きるかという物差しを持ち出しながら、高遠の農業技術を何とか伝えていきたいと思えます。

命を育てられる物に水があります。高遠はそれこそ山間の地ですから、山の上の清浄な水が飲めます。まだ誰も使っていない、美味しい水が飲めること、これも高遠町民の大変な特権です。

大学で教えていて近ごろ目につくのは、公共道徳のなさです。いたるところにゴミを捨て、どこにでも煙草の吸い殻を投げ、授業中でも携帯電話を鳴らし、授業に遅れてくることを何とも思わない、

こうした学生が増えています。いわゆる自己中心的な人が増えているわけです。本来、きちんと自己中心的な生き方をする人であれば、他人も大切だとわかるはずですが、今の若者の自己中心的な考え方は、本当に自分だけの天下です。

これはそのまま、都会的な生き方でもあります。隣りは何をする人ぞ、という言葉がありますが、お互いの干渉の少ない都会は自由に生きられるという意味では、大変住みやすいのですが、それがどこかで自分さえ良ければという、自己中心的な流れになってきてしまっているようです。その結果、たとえ暴力事件が起きようとも、殺人事件が起きようとも、関わりを持ちたくないと思ってしまうふりをしていきます。このために私たちは自分自身の安全を、自分で守らねばならないところまで来てしまいました。

ところが、まだ高遠ではお互いに注意をすることがいっぱいあります。今の伊東義人町長が当選してしばらく経った時、私は桜大学で講演するために高遠に来て町長と同じ車に乗っていたのですが、雪のために前にいた軽トラックがスリップして動けなくなりました。車を運転していた若者が前に行って押し始めましたので、私も手伝いました。ふと気がつくと、町長も一生懸命押していました。おそらく車を運転していた人は、町長が押しているとは気がつかなかったと思います。こうした人のつながりがあることが、高遠の魅力ではないでしょうか。

皆さんにとって、都会の孤立した生き方は魅力がありますか。都会にあって私たちのまわりがない



高遠城の桜と仙丈ヶ岳



夕日に映える仙丈ヶ岳

うな場所を美しいと考えますか。高遠町から見た仙丈ヶ岳は本当に美しいですね。高遠城址公園の桜も、南アルプスや中央アルプスをバックにして、その美しさが一段と映えます。新緑や紅葉では、藤沢川や山室川沿いの集落や山の美しさ、これはかけがえのないものです。皆さんにとってはピルの谷間に沈む夕日と、山の端に沈む夕日と、どっちの方が魅力的でしょうか。夕日が沈む中で仙丈ヶ岳だけが赤く夕日に映えているのを見たことがあります。本当に感動的でした。これを見ることができるとは幸せではないでしょうか。

物には気がつくのですが、逆に私たちの世界にあつて都会にない物をもっと大切にしなければなりません。

皆さんは町内のどこの景色が好きですか。高遠町の中で景色の良い場所として、どれだけ数え上げられますか。点として特定の建物や木ではなく、面としての広い景観を考えた時に、皆さんはどのよ

住む人の気持ち、景観を含めて、どちらの方が自分に合っているか、どちらの方が自分らしいか、これを認識した上で、その判断などをしっかり伝えていく努力をしましょう。これもまた生涯学習です。

自己中心的な考え方は、国単位でも見られます。日本は長らくアメリカをモデルにして追いつこうと努力してきました。アメリカはもともと一人あたりのエネルギー消費量が大きく、それがまた進歩だと理解してきました。今、地球は温暖化の波に洗われており、世界中で何とかしようと努力していますが、アメリカは京都議定書にも調印していません。自分たちは使いたいだけエネルギーを使い、その影響を使っていない人が受ける、これは決して良いことはありません。都会的な自己中心のもの、この考え方の極致ではありませんか。日本でも同じようなことが見られます。都会のビルの冷暖房の排気は、すべて周囲に撒き散らされています。自分が良ければ周囲はどうでもいいという考え方は、アメリカという国をモデルに日本は長く動いてきたのですから、子どもたちが自己中心的な考え方をとるようになったという意味では、教育の成果ともいえますが、本当はとんでもないことです。

考えてみますと、現在のエネルギーはほとんど化石燃料を利用しています。化石燃料は無尽蔵ではなく、間違いない限りがある上に、二酸化炭素が放出されるのです。限りある地球資源を、特定のいわゆる先進国だけで利用していいのでしょうか。またこの時代だけで浪費していいのでしょうか。未来の地球人が利用できなくても、それは関係ないといえるのでしょうか。アメリカや日本だけがエネ

ルギー消費をしていいのか、これを地球的規模で、あるいは人類の歴史全体で見直さなければいけないのです。こうした時に、高遠町の皆さんのような互いを思いやる気持ち、これが見直されねばならないと思います。地域で生涯学習をしていく時には、同時に常に広い視野で、そして長い時間帯でものを考える訓練をしていきましょう。

現代社会が抱える課題の一つにゴミ問題があります。私たちは大量消費の時代に生き、大量にものを使い、捨ててきました。それこそ物資にあふれた、進歩の象徴だったのです。その結果、大量のゴミが出ました。以前は家ごとに焼くことが推進されましたが、ダイオキシン問題が発生してできなくなりしました。ゴミの廃棄には多くのお金がかかることが明らかになったのです。資金をかけずにゴミを処理するため、不法投棄が行われるようになりました。特に人目につきにくい山の中は、格好のゴミ捨て場にされました。高遠町にはそうしたところはないでしょうか。そのゴミはほとんど都会で出したものです。これもまた都会人のエゴともいえるでしょう。環境問題は地球規模の大問題ですが、まずは足元の高遠、自分たちの住む地域で、この問題を見つめましょう。

最初に触れたように、今やいろいろな価値観に見直しが図られています。いわゆる地方に住んでいる子どもたちに、自分たちの住む場所について将来の夢を、などといって絵を描いてもらいますと、高いビルと地下鉄、飛行機など都会がモデルにされます。また欲しい物としてデイズニーランドなどをあげます。これは先進シンボルとして東京やニューヨークがあることを示しますが、こうした都会



高遠の町並み

だけがいいのだとする考え方がいつまで続くのか、また続けなければいけないのかは大きな疑問です。少なくとも、高遠の子どもたちには高遠に住みたいというぐらいのきちんとした教育を施してやらなくては、地球そのものが駄目になるのではないのでしょうか。

町づくりのモデルはいつでもよそから引っぱってきて、都市型をめざすのがいいのでしょうか。地域には地域の自然環境、歴史環境があり、すべて個性的です。モデルは内側から探すべきです。高遠の町づくりは個性的でなければいけません。よそと同じ町をつくったら、高遠の個性は消えてしまうのです。

皆さんは高遠の町づくりが好きですか。私は町並みの修景など、なかなかのものと評価しています。古いものがなくても、みんなで協力して城下町の風情をつくり上げているのが素敵です。このようにすれば、新たな歴史の町並みが再構築されるのだという、良い例になると思います。

歴史の中で、町の中心部分やその景観は大きく変わってきました。戦国時代から近世にかけて、高遠は上伊那の中心地でした。いかにして高遠の町が変化してきたか、しっかり確認しましょう。上伊那に限っていえば、中心は高遠から伊那市に移っていきました。伊那市で

も従来の中心部にあった商店から、今は郊外店が全盛になってきています。おそらく現状での中心点もまた変わっていかざるを得ないでしょう。そうした状況を認識した上で、私たちは高遠をもう一度見直し、新たな視点で町づくりをしていかなくてはなりません。その時に素材になるのは、地域に積み重ねられた伝統と文化でしょう。それを学ぶことも生涯学習の意義です。

歴史は過去にあったものだけでなく、これから私たちが主人公になってつくり上げていくものでもあります。私たち一人一人が歴史の主人公だとの自覚のもとに、より良い未来をつくる努力をしなければなりません。どんなすばらしい文化も、誰かが始めたものです。歴史はゼロからは出発しえてくれている人々の努力があるのです。私たちが新たな文化を創造しようとする時、それを支えるのが生涯学習なのです。

高遠には誇るべきたくさんさんの文化財や伝統文化がありますが、それもいつかの時点で、誰かが創ったものです。ひるがえって考える時、私たちは次の時代に残せるような新たな文化を創造しているでしょうか。博物館に展示されたり、学校で教材になるようなものを生み出しているでしょうか。第二次世界大戦後、日本の社会は急激に豊かになりましたが、文化的に私たちはどれだけ豊かになったでしょうか。昭和の時代、平成の時代として、この時代が生み出した文化をきちんと持っているでしょうか。高遠は確かに歴史にあふれたすばらしい町ですが、ひよっとすると過去の遺産を食いつぶして



桜のしだれ

はいないでしょうか。過去の遺産の上にどれだけ私たちが新たな文化を重ねられるか、それが問題なのです。

皆さんが住んでいる高遠の町は、町全体として素敵な町になっているでしょうか。私はこの町にはいろいろな魅力があると思うのですが、その魅力をみんなで自覚し、もつともつと素敵な町にしていかなければなりません。住んでいる住人がいいと思うような町でなければ、何度も町を訪れる観光客はやってきません。一度桜を見たらそれでいい、という町では、町が駄目になります。住民が住んでい

て本当にいい町だな、と感じるような町であれば、よその人も来たくくなります。

町の主人公は観光客ではありません。皆さん自身なのです。住民にとって一番大事なのは、良き隣人関係を保つことができるかどうかです。そろそろ高遠も、桜よりもとてもいい人たちがたくさん住んでいる町だから、人に会いに高遠に行こうと、訪れる人が増えた、そんなことをいわれるような町にしていきたいませんか。

高遠町の先人たちは、この町を良くするために本当に頑張ってきました。私たちが無理をしているわけではないのです。私たちの努力は、先人たちと比較して決して大きなものとは





進徳館

いえないので。

高遠は江戸時代を通じて内藤家三万三、〇〇〇石の所領として知られ、伊那谷における政治、教育、文化、経済の中心として栄えてきました。中でも学問が盛んだったことは高遠の誇りです。砲術の天才として、また儒者、教育者として有名な阪本天山が「高遠の学」となり、やがて進徳館ができました。中村元恒は七代藩主内藤頼寧に招かれて儒官となりましたが、藩士の自給自足のために六道原の原野開墾を教えたのを契機に黒河内村に幽閉されて死にました。八代藩主内藤直頼は学問所設立の計画を進め、岡野小平治を文武総裁に任じ、中村元恒の子ども中村元起と海野幸成を師範として文武所をつくりました。は

じめ三之丸学問所と呼ばれていたのですが、後に進徳館と名前を改めました。中村元起は父の意志を継いで『落原拾葉』の続編の編集にあたりました。この中村家の二代の献身的な努力により、高遠の学問は飛躍的に伸びたのです。元恒の命をかけてまでの学問と教育への熱意が、後の時代を支えました。私たちは彼ほどの努力をしているでしょうか。

藩校進徳館は明治四年（一八七二）の廃藩置県により、十数年で廃校となりましたが、中村元起の次男で林学博士第一号の中村弥六、師範教育・音楽教育などで有名な伊沢修二などをはじめとして、

多くの政治家、教育家等を輩出し、「高遠の学」は後世に伝えられてきました。高遠は信濃を代表する教育の場として知られたのです。今、高遠は必ずしも教育の町として名高くはありません。みんなが学ぶことによって、再度、高遠を教育の都にしていましましょう。

私たちは過去に生きた人々の努力を、敬愛の念を持ちながら顕彰しなければなりません。それと同時に、皆さんもいつの日か未来の高遠住人から、あの時に頑張っていてくれたから今があると、ふり返ってみられるよう努力をして欲しいものです。

## 二 ふるさとには歴史と文化に満ちた町

それでは我が高遠はどんな町なのでしょう。生涯学習の一環として、高遠の歴史の一端に触れ、地域の特性を認識しましょう。

信濃の歴史を見ると、原始・古代の時代から大きく文化が南と北に分かれていました。その文化は、天竜川と千曲川をそれぞれ幹線通路として入っているようです。当然のことですが、高遠は信濃の南の文化圏に属しています。いうならば、南から天竜川をさかのぼる文化の上流部に高遠は位置しているのです。

高遠町では、旧石器時代に関係する遺物として縦長の剥片はくへんを素材として、菱形に加工した茂呂形もろがたと呼ばれる黒曜石を用いた石器が出ており、中部・関東とのつながりが想定されます。

縄文時代の早期の遺跡として知られる宮の原遺跡からは、東海地方やそれより西に分布する土器が出土していますから、縄文時代早期における東海地方とのつながりが想定できます。

縄文時代の中期になると、上伊那郡宮田村の中越遺跡出土の土器を標準とする中越式土器が高遠からも出ています。

高遠で忘れてならないのは、諏訪とのつながりの深さです。「諏方大明神絵詞」によれば、南北朝の頃まで伊那の太田切川付近が、諏訪と伊那の境にされていたようです。養老六年（七二二）から天平三年（七三一）の間、「諏方国」が信濃国から独立しておかれました。当然、この時には高遠も諏方国に入っていたはずです。

南北朝の初め頃に高遠の城主が断絶したので、近隣の郷士たちは諏訪の大祝頼継に相談しました。そのころ頼継には信員・信継の二人の子どもがいましたが、重要な位置にある高遠を確保するため、頼継は惣領の信員を高遠の城主としました。彼が高遠氏の始祖です。こうした経緯から、戦国時代に武田信玄に味方した諏訪（高遠）頼継は、本来、自分の家こそが諏訪惣領家を継ぐべきだと考えておりました。

高遠は諏訪の枝文化の地だったわけですから。

戦国時代、武田信玄が信濃に侵攻してくると、高遠は武田軍の伊那谷侵入の入り口として用いられました。信玄が三方原合戦に向かうにあたって、このルートは重要だったのです。

信玄の子どもの勝頼は永祿五年（一五六二）から高遠城主になっています。信玄の長男義信よしのぶが廢嫡になったのを契機にして、勝頼は元龜二年（一五七一）頃に甲府に移りますが、本来、高遠の城主として独自の家臣団をつくっていました。勝頼は武田家の通字である「信」を用いず、「頼」を用いていますから、諏訪氏の名跡を継いだ人物です。彼が高遠に入ったこと自体、いかに高遠が重要であったかを示します。

その後には、勝頼の弟の仁科五郎盛信が入りました。本来、甲州人ともいえる彼が、県歌である「信濃の国」にうたわれているのは、武田氏滅亡の折り、ただ一人徹底抗戦して散っていったためでしょう。それはそのまま桜の散り際と重なって、高遠らしく見えます。

こうした状況からするなら、武田信玄にとって信濃でもっとも重要な場所が、この高遠だったといえるでしょう。

江戸時代には高遠藩が置かれ、杖突峠つえつきとうげを越えて参勤交代をいたしました。また、ここから南への道は秋葉街道あきはとして用いられました。いうならば信仰の道だったのです。同時に多くの物資がここを通っていきました。鉄道が開通になる以前、高遠は諏訪と伊那とを結ぶ重要な道の拠点だったのです。ところで、「鰍沢かじかざわが遠い」という言葉は今でも生きているのでしょうか。「鰍沢が遠い」とは塩分が薄い、塩気が薄いことを示すとのこと。つまり、鰍沢とは塩を指すのですが、これは富士川をさかのぼって塩が甲斐に入り、富士川の河岸である鰍沢で馬の背につけなおされ、その塩が当地にまで

来ていたので、このような言葉になったのだといえます。このように高遠は甲斐と深い関係にありま  
した。

高遠藩は参勤交代に甲州街道を用いましたが、江戸では新宿に高遠藩の下屋敷が設けられました。  
現在、日本の中心ともいえる新宿は、高遠ときわめて深い縁に結ばれているのです。ちなみに、高遠  
町の下屋敷が新宿にあったことを縁に、昭和六十一年（一九八六）七月二日、新宿区と高遠町は友好  
提携を締結しました。



タカトオコヒガンザクラ

高遠と聞いてたいていの人が思い起こすのは、高遠城跡の桜です。  
高遠町にとって桜はシンボルであり、多くの観光客を引き付ける資  
源です。これも一三〇年前に桜を植えてくれた人たちがいたおかげ  
です。

明治四年（一八七一）廃藩置県となり、明治五年、高遠城の建造  
物や樹木などが競売で売られました。その跡地へ旧藩士たちが高遠  
町小原の「桜馬場」（現在の高遠小学校あたり）から持って来たコヒ  
ガンザクラを植え始めました。明治九年頃に、城跡にそれが花を咲  
かせるようになり、以後、高遠城跡の桜は名所になりました。

中興館を創設した矢島一三は、小松伝一郎等とはかつて高遠会を

結成し、昭和九年には二二〇余人という大きな団体を高遠公園観桜会として高遠に送り込みました。これを契機に大人数を収容できる施設をと、池上秀畝・広瀬省三郎・小松伝一郎等と協力して、高遠閣<sup>たかとお</sup>を建て、町に寄付したのです。昭和の初頭に高遠の桜はこれほど有名になっていったのです。高遠閣もまた、高遠出身の人々の思いによって建てられたのです。

昭和三五年（一九六〇）二月一日には、コヒガンザクラ樹林が長野県の天然記念物に指定されました。やがて昭和四八年五月二六日にいたり、高遠城跡が国の史跡に指定されました。

平成二年（一九九〇）に町は「高遠さくら計画」を作り、城址公園の東、月蔵山麓一带に「花の丘公園」を設け、「花の段々畑」や、世界中の桜を植えた「桜見本園」などをつくりました。さらに、この年には世界各国の代表を集めて、「国際さくらシンポジウム」を開いたのです。

先祖たちが植えてくれた桜は、これを植えた人々にとってはそれほどの利益にならなかったでしょうが、後世の高遠町の住民に対してかけがえのないプレゼントとなりました。四月中旬の桜の時期には毎年四〇万人以上もの観光客が訪れます。

公園北口には、休憩所・会合の場所として利用されている高遠閣があります。その他、公園内には、太鼓櫓、当時の土塁、無字の碑をはじめとする数々の碑文等、古きを偲ぶ材料がたくさんあります。こうしたことを前提にして、平成一二年三月に「史跡高遠城跡整備基本計画」ができ、桜と共存しながら史跡整備をしていくことが決められたのです。

先にも触れましたが、高遠の町は大変美しく生まれ変わりました。これは平成八年（一九九六）に本町通りの「都市計画街路事業」が完成したからです。この魅力ある町並みは、きつと将来の財源となっていくことでしょう。私たちは桜に学びながら、今を享受するだけでなく、未来に向けて投資をしていかねばなりません。その投資先は、我々が生涯を通じて学ぶ中から探し求めていくしかないのです。

今はほとんど忘れ去られていますが、我が高遠が日本全国に広く名を残したことがあります。それは高遠石工の活躍です。高遠領の藤沢・入野谷郷は山村で耕地が少ないため、冬の間は仕事が無かったので、住民が石工として働きました。石工たちは人口の増加するにつれて各地に出稼ぎに出て、九州から関東一円にその作品を残しました。一般に現存する最古の作品とされるのは、山梨県山梨市にある窪八幡神社神門前にかけられた石の反り橋で、「神社本紀」によれば天文四年（一五三五）、鳥居（木造）とともに架設奉納されたものといえます。しかしこの説は疑問で、実際の作品は十七世紀の半ば以降に出ています。

はじめは冬季のみの作間稼ぎでしたが、幕末になると本業化し、年中村に帰らぬ者もありました。そのため高遠藩では各郷に「石切目付」を任命し、運上の取り立てや、仲間の取り締まりにあたらせ、不在中の田畑の作付けや、年貢、役勤めなどは村役人、五人組などに責任を持たせることにしました。それで毎月「石切人別御改帳」あるいは「他国稼御改帳かせぎ」を作り、村名主から代官へ出すことに



桂泉院の地藏尊



建福寺にある守屋貞治の作品

なっております。

ペリーが来航して開国通商を迫ると、幕府は国防に意を注ぎましたが、嘉永五年（一八五二）高遠の出稼ぎ石工（藤沢郷）二二六人のうち、一〇〇名が動員されて品川浦砲台築造工事に従事しました。このことをとつても、幕末にいかにも多くの石工が高遠から出ていたかがわかります。

高遠石工の中でもっとも有名な人物が守屋貞治もりやまぢです。彼は高遠藩藤沢郷塩しお垣かき供（高遠町大字中村塩垣）に、守屋孫兵衛まごべえの三男として、明和二年（一七六五）三月三日に出生しました。生涯に三三六体の石仏を建立しましたが、その足跡は信州一円はもちろん、関八州から東海、西国では遠く山口県にまで及んでいます。彼は天保三年（一八三二）十一月一九日に六八歳で、自宅において没しました。

高遠にも多くの彼の作品が残っています。数が多いの





大聖不動明王

ず、立派な芸術家です。

守屋貞治も職人ですが、高遠には多くの職人が存在しました。守屋貞治たち石工が仕事をするには、鉄製の鑿のみが必要だったはずですが、江戸時代には鍛冶村がありました。ここで作られた鉄製品が彼らの仕事を助けたのではないのでしょうか。

高遠を代表する職人として、室町幕府に抱えられた池上家にも関係すると思われる番匠ばんしょうの池上家があります。その根拠地が番匠村です。池上清左衛門政清まことちよは文亀二年（一五〇二）に遠照寺（三義地区）の多宝塔（国重文）や釈迦堂（国重文）を建築しています。その後、池上氏は高遠城築城の時から武田氏に仕え、下伊那方面まで築城の工事に参加したので「武田の番匠」として名高くなりました。

高遠駅に近い建福寺けんぷくじで、本堂の前に町宝に指定されている「六地藏尊」をはじめとし、三五体の石仏があります。東高遠の桂泉院けいせんいんには延命地藏大菩薩など三体があります。特に私がすばらしいと思うのは、高遠町勝間常盤橋西袂にある大聖不動明王です。また天女橋北袂たむとにある延命蔵大菩薩も見事です。これらの作品を見ますと、とても石を彫ったとは思えないぐらい表面が滑らかで、自在に仏を彫り出しています。とても単なる職人とはいえ

西高遠の渡辺氏の屋敷内に「番匠むらぬめい邑之銘」という碑があります。これは文化九年（一八一二）六月に建てられたのですが、碑側面には大目付や勘定奉行などを務め、歴史に詳しくかつた星野ほしの葛山かつさんがその由来を記しています。

こうした職人たちの動きは、技術を持ちさえすれば、それできちんと生きていけることを示します。今や日本においても職人の技術が絶えようとしています。かつての高遠職人の動きを見ると、もう一度、技術で地域を立て直す道もあるのではないかと思います。特別な技術を持つ者は、どこに行っても働くことができるのです。

高遠におけるお土産の一つに高遠焼があります。濃い釉薬ゆうやくのかかった独特の焼物です。「高遠焼覚書」によると、文化九年（一八一二）に内藤頼以が月蔵山の樋ヶ沢から城内に水を引く導水用の土管を焼くため、東高遠花畑に住んでいた山崎屋伝十郎を、美濃国多治見村の加藤治兵衛のもとに派遣して、伝習を受けさせたのがはじめだといえます。その後、藩は高遠でも焼物を作ることを計画し、加藤治兵衛の斡旋で、美濃国土岐郡笠原村の焼物師宇兵衛を一人扶持で召し抱え、焼物の仕事をさせることにしたのです。宇兵衛は文化一〇年（一八一三）一二月に家族同伴で高遠に移住し、陶土を採集する場所などを調査して、城下勝間河原に焼窯を作りました。

天保一二年（一八四二）民営に移し、勝間河原の窯は木曾屋くみぞえもん左衛門が引き受け、その後、江島の墓があることで有名な蓮華寺れんげじ下にも窯が作られました。

その後、途絶えたのですが、昭和五〇年（一九七五）に復活しました。現在、高遠さくらホテル手前から林道を登ったところに、高遠焼登り窯と高遠焼体験施設があります。その近くに売店もあり、高遠の土産の代表にもなっています。

これは、よそから招いた文化が地域に根ざした事例です。私たちはよそから技術を持ち込み、この地域独特のものに変えることによって、新たな技術を生み出すこともできるのです。

最後に高遠の食べ物について触れましょう。高遠の食べ物としてもつとも有名なものは、「高遠饅頭」まんじゅうでしょう。地元では、天正年間（一五七三〜九二）に始まり、小豆と小麦粉で作った「おやき」が起源で、江戸時代に藩主が將軍家に献上し、また諸侯に土産として好評だったと伝えています。素朴な風味は庶民に親しまれ、高遠一の名物として現在も愛されています。

近年、新たな展開を示しているのは「高遠そば」です。現在は遠照寺をはじめとして各地で「高遠そば」が食べられるようになりました。町内の飲食店関係者は「高遠そばの会」を結成し、「高遠そば」を復活させています。このそばの特徴は、辛味大根のおろしと、焼き味噌を混ぜた辛つゆに麺をつけて食べる、いわゆる「辛汁そば」といわれるものにあります。麺は十割そばを使い、つなぎは一切使っていません。

高遠城主であった保科正之ほしなかつゆきが会津へ移った時、「高遠そば」を持っていき、会津で作らせたといえます。会津若松では、今でも「高遠そば」として、大根の辛味を活かした付け汁のそばが売られています。

す。つまり、保科正之が高遠にいた頃はまだ醤油しんじゆが普及しておらず、味噌と大根でそばを食べていたのが、そのまま会津若松に伝えられ定着したのです。ところが城下町高遠では、その後、醤油が食生活に浸透し、古い食べ方は忘れ去られました。

平成一二年（二〇〇〇）九月二四日、高遠町と福島県会津若松市との間で親善交流が提携されました。江戸時代初期、高遠藩主の保科正之が後に会津藩主となった縁からでした。これによつて向こうに残っていた「高遠そば」を見いだし、逆輸入して、現在のような「高遠そば」が、高遠において売られるようになったのです。

町では「高遠そば」の復活を機に「そば」を転作の主力品目として指定し、農家の支援を行い、そばの増産に努めています。そして、地場産のそばを使用した「高遠そば」の普及に取り組んでいます。「高遠そば」が復活する前は、そばの作付け面積が全町で九ヘクタール程度でしたが、現在では約三一ヘクタールにまで増えました。また、これに付随して「高遠そば」の製麺施設や乾燥調整・製粉施設等も整備を行い、農業と観光を結んだ産業の振興の成功例の一つになりつつあります。平成一二年三月三〇日には製粉施設が完成し、今秋より本稼働に入っています。

考えてみますと、目下のところ、この二つしか食文化がないというのでは寂しい限りです。多くのお客さんを招き入れようとするのであれば、どこでもご馳走を用意します。この地域でしか食べられない物を用意しなくては、お客さんはやって来なくなると思います。

現在、高遠町では新たな文化創造に向けて、様々な試みをしています。その一つが信州高遠美術館で開催される「信州高遠の四季展」です。桜と歴史と温泉の城下町高遠では、この恵まれた自然を末永く大切にするとともに、キャンパスを通して高遠のすばらしさを再発見して欲しいと、平成一二年から「信州高遠の四季展」を開催しました。この結果、多くの絵画の応募がありました。これによって、よその人が高遠の美しさを知るのもちろんのこと、その絵画を通して町民も高遠の美しさを再認識しています。

昭和六二年（一九八七）伊沢修二記念祭を実施し、それが「伊沢修二先生記念音楽祭」となり、平成一四年には第一六回を数えました。伊沢修二は嘉永四年（一八五一）に高遠藩士の子どもとして生まれ、明治二年（一八八一）に東京芸術大学初代学長になりました。彼を記念して、故郷高遠町で



伊沢修二

開催される音楽祭です。進徳館などの教育成果が伊沢修二であり、その縁でこの音楽祭を東京芸術大学が支えてくれるのです。教育で蒔いた種は一〇〇年以上も経って、まだ実り続けているのです。

高遠町で開催されるイベントとして、もっとも有名なのは「さくら祭り」でしょう。これは桜の時期のイベントで、あえて触れるまでもないでしょう。

歴史と伝統ということでは、銚持神社ほこじで旧暦正月一四日（現在は二月一日）に開かれる「だるま市」があります。作物が豊作であるよう、五穀豊穡ごこくほうじょうを祈る祈年祭ですが、当日、参道には縁起ものの「福だるま」の露店が並び、幸運をもたらす「福だるま」を求める人でにぎわうので、この名前がついています。

毎年七月には、正徳四年（一七一四）高遠に流され、寛保元年（一七四一）にこの地で没した大奥最高の大年寄にまでなつた絵島を記念し、「絵島まつり」（現在は高遠城下祭りと改称）が開催されます。野外コンサートや子ども騎馬行列等、町民参加の各種イベントが行われます。ハイライトは約二、五〇〇人の手踊り行進です。町内や企業等のいろいろな連が揃いのはっぴやゆかた姿で、高遠音頭や伊那節を披露します。町民全体の祭りとしては、もつともにぎやかだといえるでしょう。絵島の墓がある蓮華寺本堂では、絵島の法要を行い、高遠で生涯を終えた絵島の霊をなぐさめます。

九月二三日には、豊作と無病息災を感謝して、「灯籠まつり」が行われます。各戸が笹竹にほおずき提灯を灯しますので、町全体が提灯のトンネルになります。その明かりの中を揃いの花笠、はっぴの身仕度で、三味線や笛太鼓などの楽器を奏でながら、「高遠ばやし」や子ども御輿みこしが練り歩きます。

旧暦の七月二二日には、「二十二夜祭」が行われます。これは願い事に対する月待ち信仰の行事です。願い事かなうよう、また、かなったらお礼として、月が出るまで座らずに待つ「お立ち待ち」が行われます。

さらに、「高遠ほたるまつり」「高遠そばまつり」「三峰川サマーピクニック」などが行われ、町民を活性化させています。

おわりに

高遠は幕末の進徳館に代表されるように学問の都であり、人づくりに努力した土地柄でした。その延長線上に、現在も歴史博物館・信州高遠美術館、そして文化センター・図書館が設置されているのです。さらに公民館が、本館・高遠分館・長藤分館・三義分館・藤沢分館・河南分館と用意されています。これらを含めて様々な施設は学ぶために造られた、人づくりの拠点です。皆さんはこうした施設を本当に有効に利用していますか。有効に利用しなかったら、もったいないですよ。

歴史博物館も信州高遠美術館も、本来、入場する対象者は町民でなくてはいけません。観光客にはそのお裾分けをしてやるぐらいのつもりにならなくては、町民が学んでいる町、生涯学習をしているところ、とはいえないと思います。繰り返しますが、これらの施設は住民が楽しみながら学ぶ場所、生涯学習の拠点なのです。

これから高遠町がもつともつと良くなるためには、それだけの人材を用意しなくてはなりません。幕末・明治維新期においては進徳館から羽ばたいた人たちが、高遠はおろか日本をリードしたではありませんか。それはすべて教育のなせる技でした。教育の場として、今よりもつと多くの人が集まる



池上家

歴史博物館・信州高遠美術館・図書館などであって欲しいと思います。高遠町はすばらしいところですが、これらの文化施設に限らず、町内全域が学ぶ場所です。観光客も施設だけを見に来るのではなく、町そのものを見ていきます。町全体が博物館としての機能を持っています。その際には良いところだけでなく、悪いところも積極的に見てもらい、どうしたらよいのか外の人の知恵にも耳を傾けましょう。

私たちの現在、過去の積み重ねの上にあります。過去がすべて良いものであれば、今のような大転換は必要ないものです。逆に過去が悪いものばかりだったら、人間はこのように楽しく生きられないはず。どこの博物館に行っても良いところばかり展示してあって、弱点は展示してありません。町全体が博物館ということになれば、そういうわけにはいきません。

高遠町には多くの文化財があります。ところが多くの人は知識としての文化財に興味はあっても、それを本当に学んでいるかといえ、そうでもありません。文化財は私たちが学んではじめて文化財になるのです。単純に大切にすれば文化財とはいえないのです。私たちがしっかり文化財を学べば、私たちの町がいかに魅力にあふれた、歴史を経た町かわかり、自分たちにも自信が持てます。過去を学ぶことに



よって私たちは誇りを持てるのです。その誇りを胸に抱き、新たな未来を築いていこうではありませんか。

皆さんが生涯学習をすることは、そのまま高遠町の未来につながります。すなわち皆さん一人一人が高遠を本当に良いところだと思い、それを声に出せるかどうかによって、子どもたちがこの地に住んでくれて、もっと良い高遠町をつくっていかうとするかどうかが決まります。

皆さんはここで学んでいます、日本全国どこでも、皆さんと同じように学んでいる人がいます。どこでも努力をしているのです。みんなが勉強しないでいて、ふるさとなどわかるわけがありません。ふるさとの実態がわからずして、地域が良くなるはずがないのです。お腹が痛いのに目薬をさしても意味はないのです。高遠の実態をよく知ることが、未来の高遠を築くことになるのです。

皆さんはこんないい機会を、町の方でつくってくれているのですから、もっともつと学んでいきましよう。

生涯学習に関係して、「知恵を出せ、出せない者は金を出せ、金のない者はすぐを出せ、何もない者は邪魔するな」という言葉を聞きました。これは地域づくりでも同じだと思います。学ぶためには知恵が必要です。地域を良くするためにも知恵が不可欠です。まずはこうしたらどうだろう、という知恵を提供して欲しいのです。しかし、知恵はすべての人が出せるわけではありません。知恵が出せない者は行動資金、活動資金を提供して欲しい。知恵に変わるものとして資金を出して欲しいというこ

とです。では知恵も、お金もない者はどうすればいいのか、そうした人にはずくを出してもらって、実際に行動して欲しいということです。でも俺には知恵もなければ金もない、時間も無いぞという人はどうすればいいのか、他の人がやっていることを邪魔するな、というのです。何もしないで文句ばかりいう人は多いのですが、そうなるな、他人がいいことだと思つてやっていることの、足を引っぱるな、これは大事なことです。

こうしてみても、これから世の中を良くするためには知恵が必要だといえます。知恵を生み出すように下準備をしてくれるのは教育です。今のように社会の危機的な状況においてこそ、教育が必要なのです。皆さんが行っている生涯学習は、これまで以上に大事なことです。小泉首相は首相になつた時に「米百俵」の精神をいいました。米百俵の精神とは、苦しい時に目の前の食糧としての米に手をつけず、これを教育のために利用しようということでした。小泉首相の場合は口だけで、言葉をもってあそんだだけですが、私たちはこれを実践していきたいと思います。

教育は未来のための投資なのです。高遠町でも教育のために相当の予算を組んでいます。学校だけが教育施設ではないのです。博物館・美術館・図書館などは教育施設です。ここで町民が一人でも多く、自分を考え、未来の町のことなどを考えてくれたら、それは大きな意味を持ちます。私たちは教育の可能性を信じて、未来のために教育へ投資をしていくしかないのだと思います。これはそのまま個人でも同じです。私たちが人としてより豊かに生きるためには、生涯をかけて学ぶしか手段があり

ません。学ぶことはとても楽しいことです。

文化にはお金と時間がかかります。教育はすぐに実効が現れません。すぐの効果を期待することはやめた方がいいのです。高い山にはすぐに登れないですすね、長い時間とトレーニングを経て登ります。その結果は登った者でしかわからない感動を与えてくれます。私たちのまわりでも、すぐに効果の出るものと出ないものがあります。教育や地域づくりは即効性はないけれども、確実に育っていくものだと私は考えます。その見本こそ高遠町が誇る進徳館教育なのです。

だからみんな生涯をかけて学習をしていきましょう。私たち一人一人が学ぶことが、高遠を良くしていくことに直結します。私たち一人一人が将来の高遠町の礎になるような覚悟で、学んでいきましょう。これまでは町づくりも建物などに力が注がれてきましたが、これからはソフトの時代です。人づくりをしっかりしていかなばなりません。

町づくりは観光客のためにはありません。住民がいかにしたら暮らしやすく、誇りに満ちて、豊かに生きる町になるかが勝負です。なんといっても住民がみんな仲よく、安全に暮らせることが第一です。そして住んでいる人たちがいつもにこやかな顔で、住んでいることが楽しくてならないというようであればいけません。長い目で見たら高遠だけが良くても駄目で、日本全体、世界全体が同じようになつていかなばなりません。私たちは世界に訴えるくらい良い町をつくりましょう。

高遠町は平成一四年八月六日に高遠町環境方針を定めました。その基本理念には次のようにうたわ



高遠閣

れています。

「高遠町は、東に仙丈ヶ岳を仰ぎ西に駒ヶ岳を望む四季折々に美しい景観に彩られた城下町です。殊に全国に名高いタカトオコヒガンザクラに代表される高遠城跡をはじめ、多くの自然と歴史遺産は香り高い文化を創り、恵み豊かな自然環境が美しい人の心を育んできました。先人によって守られ、受け継がれてきた良好な自然環境を維持し、将来の世代に継承するために、自然にやさしく人に優しい環境づくりをめざします。その具体的な活動として、高遠町自らがISO14001環境マネジメント

トシステムを構築し、日常業務活動に伴う環境負荷の低減と環境保全、汚染の予防に推進して参ります」

高い理念に向かって、我が町はきちんと動き始めました。こうした心を町民全員が持つようにしたいものです。

もう一度、私たちは一〇〇年先を見据えて行動していきたいと思っています。木も一〇〇年以上経てば大木になります。そのためには持続する心が必要です。幸い私たちのまわりには、高遠の桜という大変立派なモデルがあります。私たちは新たな桜を植えていきたいと思えます。

町づくりも従来と異なる新たなイメージが必要です。それを可能

にするのは、皆さんの生涯学習です。

あれだけ繁栄した昭和の時代で、高遠はどれだけのものを残せたでしょうか。おそらく戦前の高遠閣が残るくらいではないでしょうか。私たちはこの建物だけは四〇〇年先にも残すことができるようにしたいといった、長い時間の中でのものを考えるようにしていかなくはなりません。そのためには何かを捨てるくらいの覚悟がなくてはいけないでしょう。あれも欲しい、これも欲しいという時代ではなく、これとあれを我慢するから、これだけは、というようにしていかなければなりません。

みなさんでもう一度、初心に戻って生涯学習の宣言をし、未来に向けて頑張っていきましょう。